

## 知的障害特別支援学校における保健体育の授業づくり

—授業づくり過程への参加を通して見えた現状と提案—

○青島 摩子  
(静岡県立清水特別支援学校)

香野 毅  
(静岡大学教育学部)

KEY WORDS: 知的障害 保健体育 授業づくり

## I 問題と目的

知的障害児者には、身体の動かし方の不器用さ、姿勢の歪み、力加減をコントロールする難しさ、習得に時間がかかるなど身体的不器用さの課題がある。さらに、運動課題に対する理解の問題や、運動への動機づけの弱さも合わせ、運動習慣が確立されにくいという指摘もある（奥住,2012）。このような課題に対し、学校体育は児童生徒の健康面も含め、対応することが期待される。山元（2018）は、知的障害特別支援学校において、「体育（保健体育）」は時間的にも割合が大きいことを報告している。

そこで本研究では、知的障害特別支援学校での保健体育の授業づくり・実践に参加し、そのプロセスや生徒のあらわれを分析することと、事前情報（実態把握や指導要領の抜き出し等）の提供とその作用を検討することを通して、授業づくりの現状を探り、提案を行うことを目的とする。

## II 方法

知的障害特別支援学校の中学部をフィールドに研究を行った。研究の実施にあたっては、学校長および対象生徒3名の保護者に紙面および口頭にて研究内容の説明と依頼を行い、同意を得た。

対象生徒の実態把握 (KY-M, Vineland-II, 感覚プロファイル, 運動・姿勢を中心とした対象生徒の観察) の実施とそのデータの提供、保健体育の授業の参観、教師 (保健体育授業担当者) へのインタビューを行った。

### III 結果

授業の参観やインタビューから得た保健体育の授業づくりプロセスや特徴についてまとめる。

### ① 実態把握

日常生活からの課題の拾い出し、体力テストによる一般の中学生との比較、作業学習から手先の不器用さや身体の使い方の把握を中心に実施されている。体育の各単元に沿った実態把握を開始前に十分に行うことは難しい。各単元開始前には基礎的な実態をもとに、前年度のあらわれや類似する活動から生徒の実態を想定して単元計画や授業内容（活動）、グループ編成が検討されている。

## ② 内容・目標の設定

特別支援学校学習指導要領や前年度の同単元の計画、振り返り等から導かれている。主活動から各グループの実態に応じて、活動内容（競技）の簡易化や変更、個別化、目標の調整が実施されていた。加えて単元初期に把握された各生徒の実態が、指導目標・内容の調整に用いられる。

## ③ グループ編成（実態別・学年別）

学年別のグループでは、教師が日頃の生徒の様子から個々の課題や実態を捉えやすく、教師間の情報共有や共通理解も図りやすい。一方で、生徒の実態の幅が広くなり、実態に沿った集団活動の実施は難しい。実態別のグループでは、実態の近い生徒同士で活動することで、活動内容や目標の設定がしやすく、集団活動も取り入れやすい。一方で、他学年の生徒の情報共有等には課題がある。

#### ④ 評価

指導の成果や集団としてのあらわれは、学習指導要領で

示された3観点(知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度)で評価されている。一方で、個々の生徒については、個別の指導計画の目標に沿った評価にとどまり、各単元での具体的な評価基準の設定や評価には課題がある。

#### IV 考察

- ・実態把握、授業内容・目標の設定、グループ編成は授業の進行とともに調整されていく。
- ・生徒個々の動作や技能面の課題や活動理解の難しさ、競技特性へ意識を向ける難しさなどが見受けられた。
- ・学習集団内の体力差や運動能力差が大きく、同一の活動を指導する難しさや、待ち時間が多く運動量が確保されにくいことなどが現状である。
- ・実態把握は、どの單元にも共通する基礎的な実態把握であって、各單元に沿った実態把握は実施できていない。
- ・各単元の要素と個々の生徒の実態を合わせて把握し、評価していく必要がある。

これまでの考察から、以下に知的障害特別支援学校における保健体育の授業づくりへの提案を示す(図1・表1)。

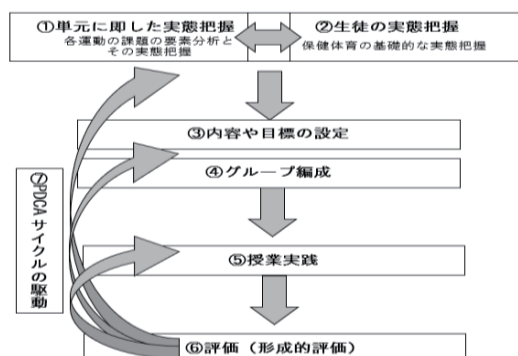


図1 保健体育の授業づくりへの提案（フローチャート）

表1 各運動の課題の要素分析の3観点の定義

①単元に即した実態把握(各運動の課題の要素分析とその実態把握  
教材研究で、学習指導要領の3観点「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を基盤に、各運動の課題の要素分析として3つ  
視点(「技能(スキル)」、「ルールや活動内容についての理解」、「運動(競技)特性」の  
意識))を設けて、学習指導要領のキーワード抜き出しを参考に各運動(体育分科)について  
7の領域」の要素分析を行う。

＜単元に即した実態把握(各運動の課題の要素分析)の3観点の定義＞

「1」知識及び技能  
「知識及び技能」を課題分析では「技能(スキル)」とする。  
※各種の運動の特性に応じた基本的な技能(スキル)について課題を分析する。  
＜領域では＞  
●ボール操作  
(シュート、ドリブル、パス、キャッチ、打つなど)  
●ボールを捕らんとする動き  
(空手やボウルの構えなどに似て、守備の動きなど)  
※KY-M感覚運動の発達段階(「覚える」「構える」「調整する」と関連させて考えられる

「2」思考力、判断力、表現力等  
「思考力、判断力、表現力等」を課題分析では「ルールや活動内容についての理解」とする。  
※保健体育科の「思考力、判断力、表現力等」を養うための基盤として、「ルールや活動内容の理解について課題を分析する」。  
＜領域では＞  
・活動内容の理解  
・運動(競技)の特性やルールの理解  
社会的育ち  
スポーツの理解

「3」学びに向かう力、人間性等  
「学びに向かう力、人間性等」を課題分析では「運動(競技)特性への意識」を指す。  
※本単元で、学習指導要領の「学びに向かう力」の基盤として、競争指導など運動(競技)特性への意識について課題を分析する。  
＜領域では＞  
・得点への意識  
・相手への意識  
・相手への理解  
達成動機  
健康への意識

(AOSHIMA Mako, KONO Takeshi)